

私の工夫

「学びを止めない」
授業を求めて

県立岡山大安寺中等教育学校

教諭 佐藤 宏美



1 はじめに

「令和の日本型学校教育」の実現にむけて、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が急務である。これは、2020年度入学生の前記課程3年間の国語科における、「学びを止めない」というテーマでICTを活用した学びの在り方について実践・考察した成果と課題である。

2 実践内容・成果

【教員の意識改革】

- ①従来型のノート指導を廃止し、デジタルでのノートづくりを推奨。(Google スライド等を活用)
- ②生徒が授業を作り上げる、生徒



図1 中学1年4月「朝のリレー」

同士・生徒と教員も「協働」する授業形態。
①では、入学当初イラストを入

れるなどの些末な部分にこだわる生徒もいたが、クラス・学年で授業ノートを互いに参考にすることで、文章を図式化するメリットや見やすさの工夫を行う生徒が増えてきた。②では、生徒自らの視点で教材を読み進める中で、共に学び合う関係性が生まれ、多様な価値観の獲得・自信の取得・学習意欲の向上などにつながった。

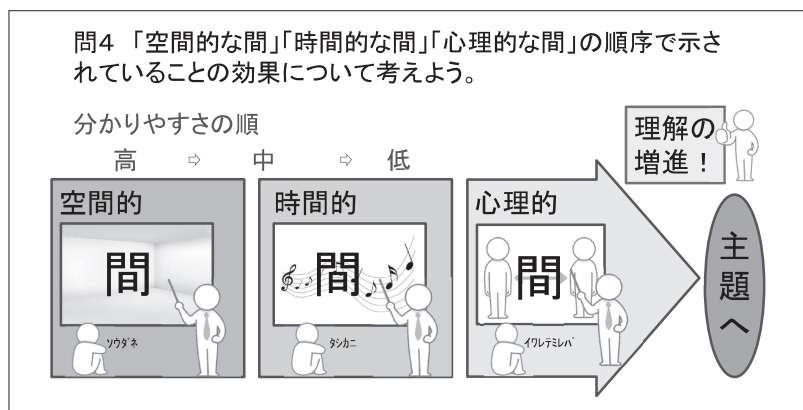


図2 中学2年6月「間の文化」

【課題解決型学習】

- ①「違和感・疑問」を大切に、振り返りで自ら課題を設定。(Google フォームを活用)
- ②小グループでの議論→課題の精選、多角的な視点の獲得、納得解を生み出すための協働から生まれる学びの発展的な深まり。(Google スライドの共有)
- ③では、授業の振り返りに Google フォームを活用した。生徒へは「わかったこと・出来たこと」以外にも「疑問に感じたこと」を振り返りで記録させ、次時への課題

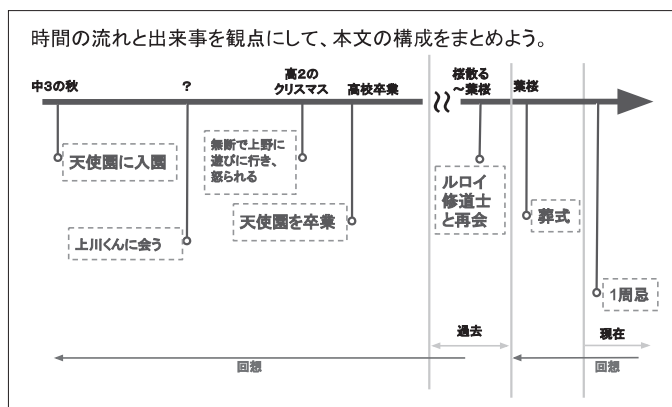


図3 中学3年5月「握手」

とした。リアルタイムで生徒の振り返りが送られてくるため共有すべきことは口頭で披露し、生徒の理解度の確認や教員自身の授業での改善点を見取る材料とした。②では、個人の読み取りで難しい部分については自席付近の生徒同士が教え合う姿が見られた。また、教員が段落や問いごとに生活班に説明することを割り当てることで、与えられた事柄についての必要な説明内容を生徒同士が議論し、説

明用のGoogleスライドを編集したり発表内容を考えたりする活動を行った。いずれも、個人の読み取りに欠けていたものに気づいたり、新たな切り口を見つけることができたりし、学びの発展的な深まりを教員・生徒共に感じた。

【Well-beingの実現】

①学校の内外を問わず等しく学べる場の設定。(Google Classroomを活用)

②デジタルの強みを最大限に生かした授業。(Google Classroomを活用)

【3年「握手」生徒の振り返りより】

- ・表現とそれが表す「私」の気持ちについてかなり多くの発見があったのでノートをまとめ直したいと思う。
- ・発表や先生の解説を聞き作品がより深く考えられるようになった。(自分でその解釈や読み取りができるようになるとおもしろいだろうな～。)
- ・発表を聞いて、自分の解釈に矛盾があって少しくやしかった。
- ・発表に使われた構成のスライドを見て、自分にはない新しい視点を知れた。今後の自分のスライドにも取り入れていきたいと思った。

【3年「坊っちゃん」生徒の振り返りより】

- ・今回授業で扱った坊っちゃんの内容は、「坊っちゃん」という作品の一部であるが、たったこれだけの内容でも、坊っちゃんがどうだ、清がどうだ、なんでこうなんだ、といろいろ考えることができてすごく面白かった。時間があれば全部の場面でみんなと色々考えてみたいと思った。
- ・坊っちゃんの人物像を少年の日の思い出のエーメールのように騙っているという発想がなかった。主人公目線で書かれていなかったら、どんな物語ができるのか気になった。
- ・私は坊っちゃんをはじめ読んだときに、坊っちゃんは性格が悪い方で清とも主従関係のような関係だと思っていたが、坊っちゃんの性格や行動の心理など深く読んでいくと坊っちゃんの内面や清との接し方が深まっていくのが心に残った。だから不朽の名作なんだなと思った。

図4 中学3年授業の振り返り

①では、たとえば欠席した場合も、Google Meetによる授業配信やデジタル画面の共有ができるよう、授業内で確認した。これにより、登校が困難な場合でも自宅のパソコン画面から授業の様子を見たり、教員とオンライン上でやり取りをしたりと授業に参加できるようになった。②で

は、ペーパーレスや情報の共有などのデジタルの強みを活かし授業で取り入れた。その一方で、単にアナログであったものをデジタルに置き換えるのではなく、それ以外にICTでできることはないかと模索し、授業内容の質の向上について探究するようになり、併せて教員のICT活用能力の向上へとつながった。さらに、Googleスライドを授業ノートとして活用することで、加筆・修正が容易となり、生徒のストレスも減少した。

【教科横断の意識】

①生徒自身が教科内で学びを完結させない。

②教員が他教科とのつながりを意識する。

①では、他教科での学びを国語科の授業でも活用するよう教員が促した。これにより、古典の学習の際には社会科での学びを活かし、作品の時代背景も捉えることができた。また、美術科のデザインの学習での「分かりやすいスライド作り」の学びを活かし、国語科でのノート作成を意識した生徒も散見された。②では、教員も他教科・他学年のClassroomに参加することで、授業内容を生徒と

共有し、他教科での学びを国語科とつなげて考えるきっかけを得ることができた。また、日頃時間が十分に取れないOJTについてもClassroomを共有することでお互いに気づきや学び、データの共有など充実して行うことができた。

3 課題

3年間の実践を通して、課題が2点挙げられる。一つは、デジタル・シチズンシップ教育の充実である。これには、教科内を問わず教員全員が理解とそれに向けての指導を共有することが必須である。もう一つは、教職員の指導力向上のための研修が必要であることと、意識改革である。教員が一方的に「教える」という立場から脱却しなければ、生徒との協働は生まれない。一緒に授業を作る、学ぶ楽しさを知れることを、生徒に実感させるためにも意識改革すなわち、教育DXの推進が求められている。前期課程での学びを後期課程にどのようにつなげていくか、今年度後期課程に進んだ私の探究意欲は増すばかりである。